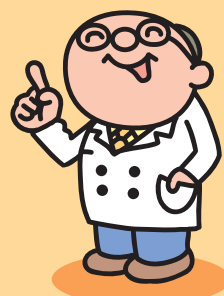


# よくわかる がん・心臓病・脳卒中

現代日本人の死因の6割を占める「がん」「心臓病」「脳卒中」。その予防法や最新治療などを専門医がわかりやすく解説します。



## 肝がん撲滅運動



手術部 部長  
外科 主任医長  
針原 康

### がん

#### 肺結核に代わる「第二の国民病」

日本肝臓学会は、近年増加しつつある肝細胞がんを肺結核に代わる「第二の国民病」として

とらえ、その撲滅に向けての運動を平成11年から展開しています。

肝がんは、転移性肝がんと原発性肝がんとに大きく分けられます。

転移性肝がんとは、例えば大腸がんの肝転移など、体の他の部位にできたがんが血液の流れによって肝臓にたどり着き、肝臓の中で増殖したものをいいます。

一方、原発性肝がんとは、肝臓をもともと構成する組織ががん化するものをいい、肝細胞から発生する肝細胞がんや胆管から発生する胆管細胞がんなどが含まれます。原発性肝がんの95%が肝細胞がんですが、この肝細胞がんが「肝がん撲滅運動」の主たる対象です。

#### ウイルス感染者への予防処置、早期発見が撲滅へのカギ

肝細胞がんは、そのほとんどはB型、C型などの肝炎ウイルスに感染して、慢性肝炎や肝硬変の状態になった肝障害の進んだ症例に発生します。

したがってB型、C型などの肝炎ウイルスに感染しているハイリスクグループに対して、ウイルスの駆除などの予防処置や早期発見・治療を行うことにより、肝がんの死亡を減少させることが可能となります。

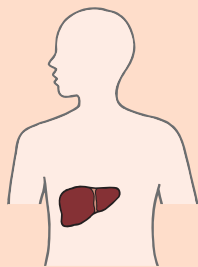
特にC型肝炎は「沈黙の病」とも呼ばれ、症状がないうちに徐々に肝障害が進むことが一般的ですので、血液検査によってC型肝炎にかかっていないかどうかを確認することが重要です。

皆さんにB型、C型肝炎ウイルスのチェックを含めた検診をお勧めしています。

### 肝がんとは？

#### 転移性肝がん

肝臓以外の部分にできたがんが、肝臓に移ってきて、増大したもの



#### 原発性肝がん

肝臓をもともと構成する組織ががん化したもの  
肝細胞がん:肝細胞から発生、肝炎ウイルスに感染し、肝障害が進んでいるなど、ハイリスクグループが明らかとなっている  
胆管細胞がん:胆管から発生、ハイリスクグループは明らかではない  
その他

## 閉塞性動脈硬化症 (ASO)

### 心臓病

循環器内科 医師  
嵐 弘之



#### ASOとはどんな病気？ 症状は？

閉塞性動脈硬化症(ASO)とは、足の太い動脈に動脈硬化が生じ、血管内が徐々に狭くなり、最後には詰まってしまう病気です。一般的には50歳以上の男性に多いといわれています。糖尿病・高血圧・高脂血症・肥満・ストレス・喫煙などの生活習慣があると発生しやすくなります。日本においても、平均寿命の延長や食生活の欧米化に伴い、近年は増加傾向にあります。

## 脳卒中の病気のひとつ、「脳梗塞」

脳卒中とは、急に意識障害や麻痺など脳・神経の症状が起きることをいいます。

脳卒中と一言で言っても、中にはたくさんの病気があります。血管が切れる「脳内出血」、比較的太い血管にできた瘤が破れる「くも膜下出血」、脳の血管が詰まる「脳梗塞」などです。

1960年代までは、脳卒中は日本における死因の第1位でしたが、高血圧治療の普及などにより、1980年代後半には悪性腫瘍(がん)、心疾患が1位と2位を占めるようになってきました。この間の医療の進歩で最もすんだのが、脳卒中の予防であったといわれています。

## 死亡内訳では脳内出血を抜き6割に

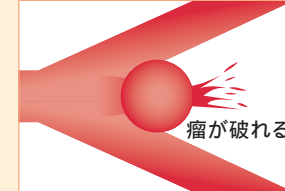
1960年代には、特に高血圧に合併して起こりやすい脳内出血が、脳卒中死亡の8割近くを占めていました。しかし現在では、脳梗塞がその6割を占めるようになっています。

### 脳卒中とは？

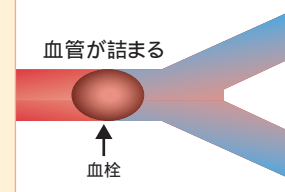
#### 脳内出血



#### くも膜下出血



#### 脳梗塞



## 脳梗塞を知ろう(1)

### 脳卒中

脳神経外科 部長  
脳卒中センター長  
森田 明夫

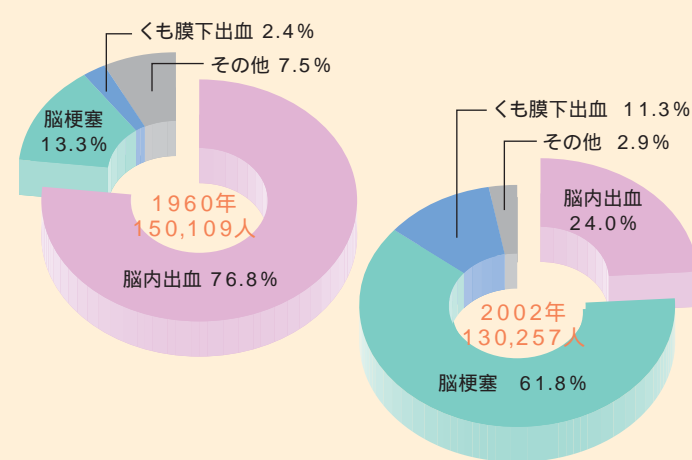


死亡率は、1960年代の年間人口10万人対170人から、1985年には100人まで減少しました。しかしその後は、脳卒中による死亡率は横ばいになってしまいました。高血圧治療の限界と、また食の欧米化による新しいタイプの脳卒中が増えてきたからです。

また、脳卒中は病院へかかる率・要介護となる率が最も高い疾患でもあります。

これから数回にわたって、現在最も多い脳卒中である脳梗塞について、その病気の原因・治療法・予防等についてお伝えします。

### 脳卒中による死亡内訳の変化



多くの場合、動脈硬化は徐々に進行するので、付近のよく通っている血管からのバイパス(側副血行路といわれます)が発達します。それでも側副血行路では十分な血流を運べないため、血流不足に伴う症状が生じます。

症状は、冷感・しびれ、かんけつせいはいこう 間歇性跛行、安静時の痛み、手足の指先の潰瘍(穴があく)・壊死(腐ってしまう)と徐々に進行していきます。間歇性跛行と呼ばれる症状は、ある一定距離を歩いた時に、太ももの裏側・ふくらはぎに痛みが生じるものです。休息すると痛みは治まるため、閉塞性動脈硬化症の患者さんは歩いては立ち止まり、歩いては立ち止まりを繰り返すことになります。

以上のような症状があった時には、外来で下肢の血圧を測る検査、CT・MRIなどの評価を行い、治療方針を検討していきます。

## 治療方法は大きく3種類

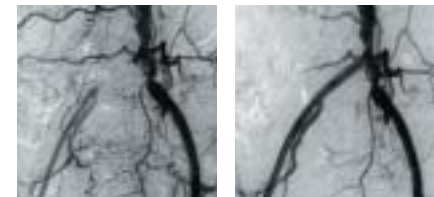
治療は、大きく分けると、内服・カテーテル治療・手術の3つに分かれます。

症状が軽い場合は、動脈硬化を進める生活習慣の改善や内服薬によって経過を観察します。間歇性跛行が生じて生活に影響を及ぼす場合は、より積極的な治療が必要となります。

狭くなっている血管が狭い範囲に限られている場合は、まずバルーンカテーテルという風船を膨らまして血管を広げ、その後、ステントという金属の管を置く「経皮血管形成術」といった治療があります。

最近では、長い範囲にわたって血管が狭くなっている場合にも、カテーテルの治療が行われるようになってきています。他方、病変が広範囲に及んでいる場合には、人工血管や自分の静脈を使って血管を交換するバイパス手術という方法があります。

治療によって、症状がとても良くなる病気です。思い当たる症状のある患者さんは、一度検査を受けてみてください。



手術前

手術後